大阪医科薬科大学病院脳神経外科におけるペランパネル処方症例の後方視的解析

柏木秀基、川端信司、辻野晃平、福尾祐介、小坂拓也、髙井聡、福村匡央、矢木亮吉
平松亮、亀田雅博、野々口直助、古瀬元雅、高見俊宏、鰐渕昌彦

大阪医科薬科大学　医学部　脳神経外科

【背景】
2018 年にてんかん診療ガイドラインが改定されて以降、抗てんかん薬の処方動向には変化が見られ、新たな作用機序を有した抗てんかん薬の処方頻度が増加している。
【目的】
診療ガイドライン改訂から数年が経過しており、新規抗てんかん薬であるペランパネル処方症例について診療情報を後方視的に収集することで、より合理的な処方方法を検討した。
【方法】
2016 年 5 月から 2020 年 4 月にペランパネルの処方を行った全 148 症例について、2020 年 6 月まで追跡した。年齢、性別、原疾患、入院／外来処方の別、KPS、処方内容および有害事象について診療記録をもとに後方視的に収集した。収集した情報を用いてディシジョンツリーを作成し、単変量・多変量解析を用いて処方が中止される因子を推定した。ペランパネル単剤開始症例での服薬中止率と有害事象発生率について、他剤併用で開始した症例と傾向スコアマッチングを用いて背景を調整し、比較・検討した。
【結果】
単変量・多変量解析において、60 歳以上でのペランパネル処方開始群や、レベチラセタム併用でのペランパネル処方開始群において、有意に服薬中止率が高かった。ペランパネルを単剤で開始した症例との多剤併用で開始した症例では、単剤で開始した症例において服薬中止率と有害事象率が低い傾向にあった。
【考察】
新規抗てんかん薬はその作用機序の相違から併用が望ましいとの考えもあるが、精神症状や傾眠、ふらつきなどの有害事象がオーバーラップするため、被疑薬判定が難しく、抗てんかん薬が中止される一因となりうる。
【結語】
ペランパネルを単剤で処方開始することで、服薬中止率と有害事象率が減少する傾向にあり、ペランパネル処方継続に繋がることが示唆された。